

C-61 作業被服の構成と地域性の研究 (オス報) 庄内木綿を中心として  
山形県立米沢女短大 徳永幾久

目的 山形県の旧米作業衣の形態区画は、終戦前迄藩政区画と同形であり、作業衣木綿はその地区の生産木綿に負う所が多い。又区画が重なる事は、藩政により区画ができたともいえる。そこでそれらを土台とした庄内、飛島の作業被服の構成と庄内木綿の関連について報告する。

方法 庄内市町村史 産業史の調査並びに作業衣の蒐集と庄内木綿工場資料の厂史的調査とその比較研究。

結果 庄内野良着は紺無地を土台とし、ジバンには刺子 半衿 肩当 前垂は縮木綿被り物は花緋で構成される。庄内縮木綿が紺地と主体を交替できないのは、度重なる酒井藩の領約令で「木綿着用、模様付半纏無用」の厳しい衣服制度を百姓に向け、青梅縮や糸入手縮を着れば監視役から指摘された事、明治政府が日本海岸の米と北海道水産物との交易を計り、米を出して衣類(木綿古着)を移入したたの工場が立ち上った事、自給作物の棉藍も移入物で駆逐され染織の下地を失った事と考えられる。庄内木綿は明治に出で大正間上昇し昭5衰へ盛りは25年である。百姓の压えられた模様物への憧憬はジバンの穩れ刺し模様と縮衿の組合せにより独特な風趣を作り出す。この意地となるものは庄内の染織工業が農家と交流しなから発達する為である。農家の去り織子は染屋に通い自分の好む縮を作る。その縮はよく売れる。染屋は織屋を兼用する。株屋は倉乏を百姓の衣の市を開き縮布を刺み売ります。これが繁盛し名物となり細布は福袋となり。飛島縮トンガや豆種袋になり再び織子の縮見本となるのである。